

論文要旨

担当教員	堀口 崇先生	学籍番号		氏名	川島 美央
(論文題名)					
脳卒中看護に役立つ臨床症状から脳画像所見を予測する技能を獲得する学習過程の検討					
【研究の動機と目的】父が脳梗塞を発症した際に、脳が全身を司り、損傷すると日常生活に大きな影響を起こし得ることを実感した。この経験から脳機能や脳血管障害についての知識を蓄えた看護師を志すようになった。短い残りの学生生活の中で、効率よく最大限の学習効果を求めるために脳卒中診療の経験が豊富な指導教員に相談したところ、正確な脳の機能解剖と脳画像を読影能力の修得を目指す方針を提示された。また、4年次の在宅看護実習では脳画像をすぐに読影できない状況で症状変化を予測することの難しさを実感し、前述した能力を身につけたいと改めて感じた。これらのことから、脳卒中看護に役立つ臨床症状から脳画像所見を予測する技能を獲得する学習過程の検討をテーマとして研究を開始した。【方法】脳の損傷による臨床症状を理解、予測するために必要である「大脳皮質の機能局在」、「神経ネットワーク」、「血管支配領域」の基本的知識について情報収集を行なった。次に個別に理解していた3領域を一つに統合でき、これらの3領域を脳断面で見たときに同一スライス内で空間的広がりを持って把握できるモデルを作成した。これをもとに、指導教員が経験した脳損傷症例の画像所見の読影を行った。その上で、与えられた質問 Q.1「損傷部位」、Q.2「損傷部位から推測される症状」、Q.3「慢性期にも運動性言語障害が遷延する画像はどれか」について解答した。はじめに、画像を見た上で、学習によって修得した知識だけで、次に作成モデルを用いて実際の画像と対比しながら解答した。モデル使用前後の正解率をもとに、今回の学習効果およびモデルの有用性について検討した。また、モデルを使用し実際の症状とは一致しなかった例についての考察を行った。【結果と考察】実症例の読影を行い正答率は Q.1 は 30 % から 70 % に、Q.2 については 40 % から 90 % に改善した。このことから本モデルの有用性が示されると考えられた。しかし、Q.3、Q.1 の 30 %、Q.2 の 10 % ではモデルを使用しても改善は見られなかった。この原因としては、①画像上の病巣が、解剖学的部位としてどこに該当するのかが、理解できなかったこと、②各疾患の病巣が慢性期になるとどのような変化を来すのかを理解できていなかったことが挙げられた。また、モデル作成過程からも改善点や、限界を見出し、モデルの課題については①大脳皮質機能局在を示すものにおいて、かなり簡略化して書いている ②矢状、冠状方向等あらゆる方向へ走行する神経ネットワークの分かりづらさ ③正常解剖が損なわれた場合はモデルの活用による読影が難しい 以上の3点が挙げられた。これらの課題は挙げられたが、本研究を通して2次元画像を3次元構造に変換すること、前述した3領域の知識の統合により、脳機能の総合的な理解ができた。これは画像の読影に加え、症状からの脳画像予想のための技能として活用できた。そのため、本モデルは脳画像読影方法を習得したいと考えている看護学生の学習時や、在宅療養の場などすぐに画像を撮影し、読影することができない環境での今後の症状予測や看護ケアの検討をする際に活用できると考えられた。					

論文要旨

担当教員	田村 紀子	学籍番号		氏名	佐藤 磨依
(論文題名) 外来通院中の高齢糖尿病患者に関して看護師が捉えた困難と看護の実際					
(内容の要旨) <目的・背景> 近年、高齢化が進む中で、糖尿病の罹患者数は増えている。糖尿病患者の療養において、看護師の役割は大きく、患者自身の主体的な行動変容や、治療に必要なセルフケアの獲得・維持を促す関わりは重要である。高齢患者の場合は、さらに認知機能の低下など、高齢者であるがゆえの課題も加わるため、看護師は患者への関わりに困難を感じている。そこで、外来通院中の高齢糖尿病患者の療養における困難を看護師がどのように捉え、それに対してどのような看護を実践しているのかを明らかにすることを目的とした。 <研究方法> 高齢の糖尿病患者への看護経験がある外来看護師 1 名にインタビューガイドを用いた半構造的面接を行い、同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビュー内容を逐語録におこし、質的帰納的に分析した。 <結果> ※【カテゴリー】《サブカテゴリー》 ①高齢糖尿病患者の療養について看護師が捉えた困難 《認知機能の低下》《薬物療法の継続困難》《データが改善しない状況》から成る【糖尿病治療の難しさ】、《好きなものを食べて生活したいという希望》《我慢しない生活》《血糖コントロールへの無関心》から成る【我慢して長生きしなくていいという価値観】、《他者のサポートを受けることへの拒否感》《自分 1 人ではどうにもならないことを実感》から成る【今後の療養に向けての葛藤】、および外来の受診頻度の状況から生じる【看護介入の遅れ】という 4 つのカテゴリーを抽出した。 ②外来通院中の高齢糖尿病患者に対する看護師の関わり 《患者の自負や自尊心を傷つけない》《患者の考えや生き方の尊重》《看護介入における葛藤》《医療職種での価値観のすり合わせ》から成る【患者の意向を最大限尊重する】、《患者の生活上の困難の把握》《患者と一緒に目標設定》《緩い制限の中でコントロール》《もう少し出来そうなことを後押し》《療養方法のシンプル化》《気分転換の方法を探る》から成る【患者の自主性を引き出す】、《地域のクリニックとの連携》《在宅サービスの調整》《新しい手技導入の獲得状況の確認》《インフォーマルな資源の活用》から成る【自宅での療養資源を調整する】という 3 つのカテゴリーを抽出した。 <考察> 高齢糖尿病患者への看護実践において、看護師は、患者の認知機能の低下による治療継続の難しさやこれまで生きてきた中で形成された価値観から生じる行動変容の難しさを困難として捉えていた。これに対して《患者の自負や自尊心を傷つけない》《患者の考えや生き方の尊重》という姿勢で患者の価値観を認めた上で、《患者と一緒に目標設定》《緩い制限の中でコントロール》《もう少し出来そうなことを後押し》などによって医療的な視点を含めた介入を行っていた。これらの関わりを、単にマニュアル的に行うのではなく、看護師が【患者の意向を最大限尊重する】という価値観を持ちながら行うことで、患者の QOL の維持・向上を支援できると推察され、看護師にとって重要な要素であると考えられた。					

論文要旨

担当教員	鈴木 美穂	学籍番号		氏名	山口莉佳
(論文題名)					
診療看護師 (NP) の役割とその貢献の解明 —診療看護師 (NP) の展望はチーム医療の要となり医療職や国民へ貢献する—					
〈背景〉 大学の講義で診療看護師 (NP) の存在について知り、その後、Google 検索でざっと調べたが、米国では NP の役割や国民への貢献は明らかとなっているものの、日本ではその役割が定まっておらず、貢献も明確でなかった。日本において看護師でありながら、医師が行う診療行為の一部を担う職種は、どのように活動し、その役割を果たすのか、さらに、既に存在している、特定行為研修を修了した看護師や専門看護師 (CNS) のような看護師ではなく、診療看護師 (NP) として新たな役割が存在することで、周囲の医療スタッフや国民にどのような影響をもたらすのか疑問に思った。そこで、診療看護師 (NP) は、国民や医療現場に対してどのような存在意義があるか、現場での思いも含め探究したいと思った。					
〈目的〉 日本の診療看護師 (NP) の実践を観察し、その活動からその役割を捉え、それが国民や医療スタッフへどのような貢献をもたらすのかを考察することを目的とした。					
〈方法〉 日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格認定試験に合格し、活動報告を公表しており、日本でクリティカルケア領域またはプライマリケア領域で看護実践し、この研究に同意した診療看護師 (NP) を対象としたケーススタディを実施した。本研究では急性期病院 (総合病院、専門病院)、診療所、訪問看護ステーション (首都圏、僻地) での実践を対象とした。各施設での事例を調査するため、合目的的に機縁法で抽出した。診療看護師 (NP) の実践を参与観察し、加えて診療看護師 (NP) がどのような思いや考えを持ちながら活動しているのかを知るために、インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを行なった。参与観察は日勤帯の 1 日を通じて、インタビューは 30 分程度実施した。インタビューで得られたデータの逐語録を作成し、参与観察のフィールドノートと照らしながら、施設概要や研究参加者の背景、診療看護師 (NP) の活動内容、参与観察中に行われていたケア・活動・特定行為、周囲の患者と医療者からの認知、果たせる役割、抱えている課題等について、表にまとめた。さらに役割と貢献に関して、対象者が共通して述べた点を記述した。					
〈結果〉 5 施設 5 名の協力を得ることができた。診療看護師 (NP) の活動・ニーズとして、プライマリ領域・クリティカル領域において、厚生労働省が定める特定行為の実践、手術助手としての活動、NP 外来での活動、周囲の医療スタッフとの協働、そして、周囲の医療スタッフからのニーズ、地域の人的医療資源としてのニーズ、医療安全を確保することへのニーズを把握することができた。また、対象者から述べられた共通の役割として【多職種連携の調整役を担う】【看護師の情報収集と観察力の向上を支援する役割を担う】が挙げられた。					
〈考察・結論〉 診療看護師 (NP) の役割は、多職種連携における調整役、医学的な知識・技術の活用、医療資源が不足する地域での実践と捉えられた。その役割は、多職種間の円滑な連携への貢献、医療の質と安全性向上への貢献、人的な医療資源として地域医療への貢献であると考察した。しかし、診療看護師 (NP) の役割の境界線が不明瞭であることから、その区分を明示することは難しいことがわかった。加えて、診療看護師 (NP) は新たな職種であるため、活動の結果を示すエビデンスの量が不十分で、客観的指標で有用性や安全性を示すことができていない。診療看護師 (NP) の展望として、研究を行った実感としては有用性があり、多くの点で医療に貢献していると考察したことから、国家資格化することで伝播できたら良い資格と考えるが、それを客観的に判断することができない。よって、診療看護師 (NP) の役割を示すには、今後も継続してエビデンスを集積し、そのあり方を吟味していく必要がある。					